

母性看護学臨地実習における学生のケアリング経験の探求

山下貴美子* 伏見正江* 森越美香* 佐野千栄子**

要旨

第4回北京世界女性会議（1995年）行動綱領は、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖における健康と権利）の推進に向けて、女性の健康に携わる専門職はジェンダーに敏感な視点が求められることを強調している。近年、ドメスティック・バイオレンスや性行為感染症など女性の人権と健康を脅かす問題が表面化しており、ジェンダー規範が根強く残る日本においては、一人ひとりの女性の背景を理解し、「女性に添う」看護が求められている。

看護教育では、思いやりや温かさをもって、倫理的・道徳的な問題にも理解を深められる人材の育成が重要であると J.Watson は述べている。本学母性看護学講座は当事者参加授業を通して、当事者の語りに共感し、他者との繋がりを体験するケアリング学習を導入している。また、母性看護学臨地実習では、妊産褥婦・新生児と向かい合う中で、看護の実践をケアリングの経験として学んでいる。このような学生の学習過程において、当事者参加授業から臨地実習へとケアリング経験の学びから看護を深める教育的効果の継続性が期待できる。

今回、母性看護学臨地実習における学生のケアリング経験状況を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を実施した。対象は2004年度母性看護学臨地実習を経験した3年生98人。質問内容は Watson のケアリング理論を参考に以下の8項目、①「看護を通して自己の成長があった」、②「妊産褥婦の心理的側面に注目できた」、③「妊産褥婦と共に添うことができた」、④「人の尊厳に気付いた」、⑤「人間の可能性に気付いた」、⑥「責任の能力が高まった」、⑦「全身があふれるような感動する体験があった」、⑧「今後の課題を見出すことができた」を作成した。各項目は5段階のリッカート尺度を用い、回答理由については自由記述欄を設けた。その結果、多くの学生は「他者との繋がり」を実感したケアリングを経験していたことが確認された。学生のケアリング経験は、看護者としての成長のアウトカムへと示唆された。

キーワード：母性看護学臨地実習 ケアリング経験 アドボカシー

I. はじめに

第4回北京世界女性会議（1995年）行動綱領は、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖における健康と権利）の推進に向けて、女性の健康に携わる専門職はジェンダーに敏感な視点が求められることを強調している。近年、ドメスティック・バイオレンスや性行為感染症など女性の人権と健康を脅かす問題が表面化している。全国では性差や女性の社会的役割を考慮したライフサイクルを通じた健康に向け、性差医療や女性診療科、

女性専門外来が普及している。山梨県においては2005年3月より、山梨県立中央病院に女性専門外来が開設され、一人ひとりの女性の背景を理解し、「女性に添う」看護が実践されている。女性の社会進出や少子高齢社会など現代の女性を取り巻く環境から女性の社会における位置や価値は変化している。女性への看護には、多様化した生き方に添い、ジェンダーに視点をおいた教育が求められていると言えよう。

J.Watsonは、ヒューマンケア（人間的なケア）

所属：*本学 母性看護学

**本学 非常勤助手

には、個人と人間の生命とに深い思いをよせ、人間の自立と関係の深い価値観、選択の自由に対して深い敬意を払うことが必要であると述べている¹⁾。また、人間と人間とがケアを進めていくプロセスには、トランスパーソナル（相手と一つになるありよう）なケアという関係を生み出すことが極めて重要であり、トランスパーソナルなケアを決定する条件として、1. 人間の尊厳を守り高めようとする道徳的熱意、2. 相手にとって主観的に重要である価値を強化しようとする看護師の意志、3. 相手の感情を実感でき理解できる看護師の能力、4. 相手と一体感を持てる看護師の能力、5. 個人の価値観の明確さや個人の成長、の5点をあげている²⁾。看護教育では、思いやりや温かさをもって、倫理的・道徳的な問題にも理解を深められる人材の育成の重要性を示唆している³⁾。本学では全学的に当事者参加授業に取り組んでいる。当事者参加授業において、学生は当事者の語りを通し、その生き方から学ぶことによって、「人間」「社会」「看護の学習者」としての課題に気づき、地域社会の一員としての自覚と責任を再認識している。本学母性看護学講座は2年次の当事者参加授業を通して、当事者の語りに共感し、他者との繋がりを体験するケアリング学習を導入している。本学母性看護学当事者参加授業では、学習成果として、女性の健康という側面から捉えた対象理解と主体的に女性に添うケアリング学習の成立が示唆された⁴⁾。看護教育におけるケアリングの効果については臨地実習を中心としたものが多く報告されている^{5) 6)}。また、授業と臨地実習に繋がる教育成果では、PBL（問題基盤型学習）や疑似体験などの報告はあるが、ケアリング学習に関する内容は少ない。3年次の母性看護学臨地実習では、妊産褥婦・新生児と向かい合う中で、看護の実践をケアリングの経験として学んでいる。このような学生の学習過程において、当事者参加授業から臨地実習へとケアリング経験の学びから看護を深める教育的効果の継続性が期待できる。

Ⅱ. 研究目的

母性看護学臨地実習における学生のケアリング経験状況を明らかにする

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

2004年度母性看護学臨地実習を経験した本学3年生98人

2. 母性看護学臨地実習形態

2週間の実習期間を通し、学生は一人のケース（妊産褥婦）を受け持ち看護実践を学ぶ。受け持ちケースへの看護と並行し、分娩期看護や新生児の看護も、多くの学生が体験できるよう随時調整している。

3. 調査方法

母性看護学臨地実習終了時に自記式質問紙調査を実施した。質問内容はWatsonのケアリング理論を参考に、母性看護学臨地実習でのケアリング体験について学生が回答しやすいよう以下の8項目、①「看護を通して自己の成長があった」、②「妊産褥婦の心理的側面に注目できた」、③「妊産褥婦に共に添うことができた」、④「人の尊厳に気付いた」、⑤「人間の可能性に気付いた」、⑥「責任の能力が高まった」、⑦「全身があふれるような感動する体験があった」、⑧「今後の課題を見出すことができた」を作成した。各項目は5段階のリッカート尺度（全くそう思わない「1」、思わない「2」、どちらともいえない「3」、そう思う「4」、非常にそう思う「5」）で評価を求め、回答理由については自由記述欄を設けた。調査用紙は臨地実習終了後、学内での面接時に回収した。

4. 分析方法

5段階リッカート尺度のデータ集計はExcel統計2000を用い平均値を出した。

自由記述内容は5段階リッカート尺度による、非常にそう思う「5」、そう思う「4」について類似する記述内容を集約してカテゴリー化し、質的に分析した。

5. 分析結果の信頼性

記述内容の分類及び解釈は、研究者4名で検討し、信頼性の確保に努めた。

6. 用語の定義

ケアリング：人と人とが主観的に関わることに
おいて、お互いを個としてその存在を尊重し、お
互いの人間性を高めるもの。

7. 倫理的配慮

学生には研究の趣旨を書面と口頭で説明し、調
査への意思は、①協力する②協力しないを選択す
る項を設け、確認した。調査協力は個人の自由意
思であり、回答内容は実習評価と無関係であるこ
とを説明した。結果は個人が特定されないようプ
ライバシーの保護に留意した。記載された内容は
看護教育指導に活かす研究としてまとめることに
ついて承諾を得た。

IV. 結果

調査に協力が得られた学生は81人で有効回答率
は82.7%であった。

1. ケアリング8項目の経験状況

ケアリン経験状況は質問の項目すべてが「非常
にそう思う」と「そう思う」を合わせ、85%以上
であった。ケアリング項目「妊産褥婦の心理的側
面に注目できた」は「非常にそう思う」と「そう
思う」を合わせると92.6%、「責任の能力が高ま
った」は92.5%、「全身があふれるような感動す
る体験があった」は91.4%、「人間の可能性に気
付いた」は90.1%であった。「看護を通して自己
の成長があった」は「非常にそう思う」28.4%、
「そう思う」69.1%でケアリング経験が一番多く、
すべての学生が今後の課題を見出すことに繋がっ
ている（図1）。

各質問項目の5段階評定（全くそう思わない
「1」、から非常にそう思う「5」）では項目「全
身があふれるような感動する体験があった」と
「今後の課題を見出すことができた」が一番高く
4.6であった。5段階評定の平均は4.4であり、学

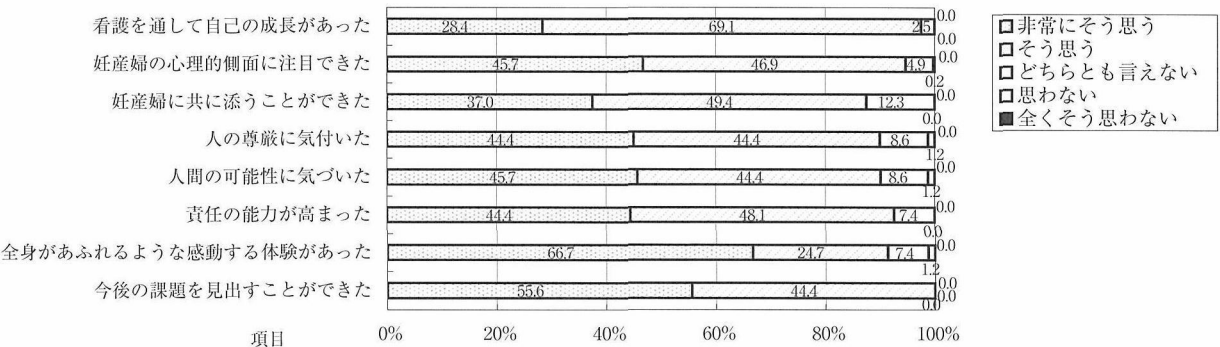


図1 ケアリング経験状況 n=98

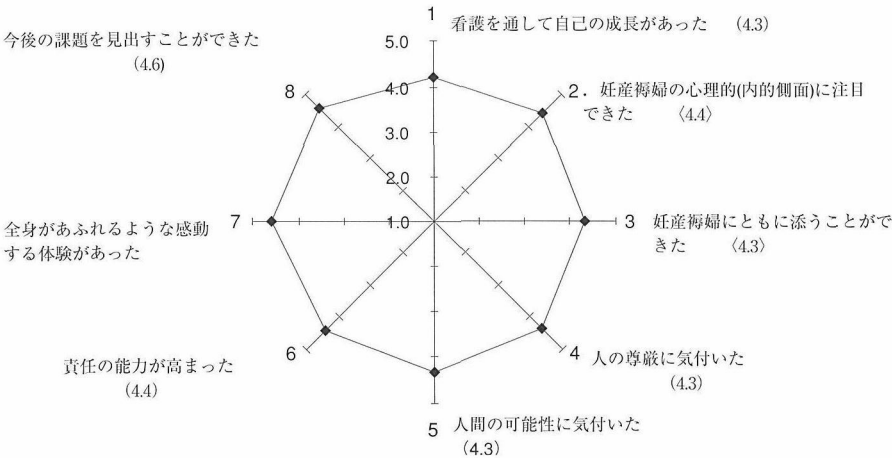


図2 ケアリング経験5段階評定結果 n=98

生はケアリング経験 8 項目を偏りなく学んでいる (図2)。

2. 項目別に見たケアリング経験内容

1) 自己の成長を通しての課題

「看護を通して自己の成長があった」のカード総数は91枚であり【看護の知識・技術】【女性の健康観】【看護観の深まり】【自己洞察】【コミュニケーション能力の向上】【生命尊重】【グループダイナミクス】の7カテゴリーに分類できた (表1)。学生は、「知識を深め技術を習得したことで、自己の成長に気付いた」、「今までに学んだことを活かして援助を考えることができた」と述べている。周産期看護の実践から、「女性のライフサイクルについて学び、自分のライフサイクルについて考えることができた」、「自分の体への関心がとても深まった」と女性への看護の体験を通し、学生自身の健康への気付きに繋がっている。学生は母性看護技術の習得や女性の健康観の深まり、自己洞察から「自己の成長」に気付いていることは注目できる。

表1「看護を通して自己の成長があった」経験内容
カード総数91枚

カテゴリー	%
看護の知識・技術 (母性看護技術、教育的指導、新生児のケア)	37.4
女性の健康観	20.9
看護観の深まり	14.3
自己洞察	13.2
コミュニケーション能力の向上	6.6
生命尊重	5.5
グループダイナミクス	2.0

「今後の課題を見出すことができた」のカード総数は77枚であり【母性看護の知識・技術】【リプロダクティブ・ヘルス/ライツに向けた看護】【カンファレンスの活用】、【アセスメント能力】【コミュニケーション技術】【看護の個別性・継続性】【その他】の7カテゴリーに分類できた (表2)。母性看護学臨地実習は妊娠・分娩・産褥期、胎児・新生児への個別性をふまえた看護を学ぶ。新たな役割習得への看護は受け持ちケースへの関わりのみならず、夫をはじめ家族への看護も含まれる。短い実習期間の中で、それぞれの対象特性の理解は充分な学習が必要になる。臨地実習を終了した学生は「自分の知識不足を感じた」、

表2「今後の課題を見出すことができた」経験内容
カード総数77枚

カテゴリー	%
母性看護の技術・知識	53.2
リプロダクティブ・ヘルス/ライツに向けた看護	15.6
カンファレンスの活用	9.1
アセスメント能力	6.5
コミュニケーション技術	5.2
看護の個別性・継続性	5.2
その他	5.2

「コミュニケーション能力をつけたい」、「ヘルスプロモーションについてさらに考えていきたい」など今後の課題が明確になっている。

2) 妊産褥婦と共に添うこと

「妊産褥婦への心理的側面に注目できた」のカード総数は88枚であり【産褥期の看護】【分娩期の看護】【周産期を通した看護】【母性意識の変化】【授乳場面における心理】【家族背景・価値観を通して】【心理的側面のアセスメントを通して】【妊娠期の看護】【その他】の9カテゴリーに分類できた (表3)。妊娠・分娩・産褥期の形態・機能的変化は大きく、また心理的にも大きな影響を受ける。学生は臨地実習において「コミュニケーションを通して不安な気持ちを知ることができ共感できた」、「分娩に向けての不安や期待について思いを表出してくれたことで心理的变化に注目できた」、「一番不安なことは何かを考えながら傾聴することができた」と受け持ちケースの心理的变化を受け止めている。

表3「妊産褥婦の心理的側面に注目できた」経験内容
カード総数88枚

カテゴリー	%
産褥期の看護 (育児不安、新生児への関心、育児技術習得過程)	19.3
分娩期の看護 (分娩への不安、産通の共感、出産への期待)	17.0
周産期を通した看護	13.6
母性意識の変化	10.2
授乳場面における心理 (母乳分泌への不安、母子相互作用)	9.1
家族背景・価値観を通して (パースプラン、育児観、家族観)	9.1
心理的側面のアセスメントを通して	9.1
妊娠期の看護 (入院によるストレス、分娩への不安)	8.0
その他	4.5

「妊産褥婦と共に添うことができた」のカード総数は67枚であり【授乳時の看護】【分娩期の看護】【産褥期の看護】【周産期の看護実践を通して】【共に添う必要性の理解】【身体面への配慮】【妊娠期の看護】【その他】の8カテゴリーに分類でき

た（表4）。母性看護学は、2週間の臨地実習期間に妊娠期・分娩期・産褥期、新生児の看護と多くの看護場面から学ぶ。学生は「陣痛で辛いときに側に寄り添い声かけを行うことができた」、「母乳栄養確立に向けて不安のある退院後の生活に向けて頑張っていこうという気持ちを理解することができた」、「新生児に対する思いや悩みに共感することができた」と述べている。学生は常に妊産褥婦に寄り添い、受け持ちケースの体験を共感していることが窺える。

表4「妊産褥婦に共に添うことができた」経験内容
カード総数67枚

カテゴリー	%
授乳時の看護（育児不安、授乳への思い、語りの傾聴）	23.9
分娩期の看護（呼吸法・産道緩和、励まし、不安・つらさの傾聴・共感）	22.4
産褥期の看護（傾聴、新生児の健康状態への関心）	13.4
周産期の看護実践を通して	13.4
共に添う必要性の理解	10.4
身体面への配慮	7.5
妊娠期の看護（身体面、心理面への配慮）	3.0
その他	6.0

3）人間の尊厳及び可能性への気付き

「人間の尊厳に気付いた」のカード総数は48枚であり【生命の誕生】【自己決定・権利の保障】【新生児の看護】【プライバシーへの配慮】【妊産褥期のケアを通して】の5カテゴリーに分類できた（表5）。分娩期の看護の体験を通し、学生は「人の誕生の場面を見学し、一つひとつの命が大切に守られていかなければいけないと思った」、「人間が生まれることはとても大変なことだと感じ、一人ひとりがこうして生まれてきたのだと思い感動した」と述べている。母性看護学臨地実習の体験の中でも特に出産場面の見学は、学生に印象強く残り、価値ある存在である人間、自分を再認識している。産科での看護は羞恥心を伴う。学

表5「人の尊厳に気付いた」経験内容
カード総数48枚

カテゴリー	%
生命の誕生	45.8
自己決定・権利の保障	16.7
新生児の看護	14.6
プライバシーへの配慮	12.5
妊産褥期のケアを通して	10.4

生は「プライバシー、羞恥心への配慮」や出産・育児の当事者である「女性の権利を大切にすると」という視点から考えたときに自己決定できるように関わっていくことの大切さがわかった」とリプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖における健康と権利）に向けた看護に繋がる経験になっている。

「人間の可能性に気付いた」のカード総数は77枚であり【女性の産む力】【新生児の生命力】【産褥期の育児行動】【看護過程からの学び】【産褥期の心理・社会的側面の変化】【産褥期の形態・機能の変化】【母子の生命力】【妊娠期の看護】【その他】の9カテゴリーに分類できた（表6）。学生は「どんなに痛くても児が産まれてくるまでの母親の強さや自分の身体が辛くても意欲的に育児に取り組み、児の成長を願う母親の強さを感じた」と述べ、また「小さな児が、わずかな表情の変化や泣き声で母親の愛情を深めていく力を備えているのだと思った」と産婦の姿や新生児の生きる姿から、力ある人間の存在を感じ取っている。

表6「人間の可能性に気付いた」経験内容
カード総数77枚

カテゴリー	%
女性の産む力	26.0
新生児の生命力	18.2
産褥期の育児行動	14.3
看護過程からの学び	13.0
産褥期の心理・社会的側面の変化	11.7
産褥期の形態・機能の変化	7.8
母子の生命力	3.9
妊娠期の看護（胎児の存在・発育）	1.3
その他	3.9

4）アドボケイトに関する責任能力

「責任の能力が高まった」のカード総数は55枚であり【新生児の看護】【自己の看護の振り返り（実習を通して）】【自己の看護の振り返り（医療事故）】【自己の看護の振り返り（看護技術・知識）】【看護モデルを通して】【母子一体としてとらえる看護】の6カテゴリーに分類できた（表7）。臨地実習において、出産場面を見学している学生は、我が子を産む母親の強さや生まれてきた命の尊さを学んでいる。学生は「新生児とふれあい、機械

表7「責任の能力が高まった」経験内容

カード総数55枚

カテゴリー	%
新生児の看護(命を預かる責任・緊張感、安全への配慮)	36.4
自己の看護の振り返り(実習を通して)	21.8
自己の看護の振り返り(医療事故)	9.1
自己の看護の振り返り(看護技術・知識)	5.5
看護モデルを通して	20.0
母子一体としてとらえる看護	7.3

的に作業を行うのではなくとても大切にされている命を預かる重大な役割を担っていることに気付いた」、「小さい命を預かりケアをすることはいつも以上の緊張を感じた」と小さな存在である新生児の看護を通して、看護の責任を強く感じ、責任のある看護実践に繋がっている。また、母子を同時に看護する産科の特殊性から「二人の命を預かる責任の重さ」を感じる学生や医療訴訟の多い産科病棟での実習で医療事故防止を意識しながら行動している学生がいる。

5) 感動体験

「全身があふれるような感動する体験があった」のカード総数は84枚であり【出産場面】【母子の愛着行動】【胎児・新生児の生命力】【受け持ちケースとの信頼関係】【夫婦の絆】【その他】の6カテゴリーに分類できた(表8)。出産場面の見学において学生は、産婦の産む力、新生児の生きる力を肌で感じ取っている。それは分娩に立ち会った学生が「産まれてきた命を実感した時に自然と涙が出てきた」と述べていることからわかる。また、学生は「分娩時に夫婦の助け合う姿」や「母親の児への愛情の深さが伝わり感動した」と母子関係や夫婦の絆から感動を得ている。

表8「全身があふれるような感動する体験があった」経験内容

カード総数84枚

カテゴリー	%
出産場面	67.9
母子の愛着行動	11.9
胎児・新生児の生命力	10.7
受け持ちケースとの信頼関係	6.0
夫婦の絆(夫立ち会い分娩)	2.4
その他	1.2

V. 考察

母性看護学臨地実習における学生のケアリング経験状況から、1. 看護の経験と他者と繋がる能

力の向上、2. 当事者参加授業から臨地実習へケアリング経験の繋がり の2点が示唆された。

1. 看護の経験と他者と繋がる能力の向上

学生は臨地実習において、看護の対象を「知ること」「見ること」「触れること」「共にそこに在ること」を体験する⁷⁾。母性看護学臨地実習では妊娠・分娩・産褥期の形態・機能の変化、さらに一人ひとり異なる妊娠・分娩・育児の体験の理解が必要となる。学生はまず、受け持ちケースの「話を聴く」。学生は受け持ちケースの語りを聴き、その人の内に潜む「こころ」を知る。その「こころ」は、分娩への期待や不安、体験した分娩の価値、胎児・新生児への愛情の深さなど様々である。学生は「知ること」と同時にその人を「見ている」。これは、学生のケアリング経験の多様さからも分かる。分娩期には、陣痛に耐える産婦のそばを片時も離れず産痛緩和のマッサージを続ける学生の姿がある。児の出生時には、産婦とその家族と共に涙して新しい命の誕生を喜ぶ学生、授乳の際には、少ない母乳分泌に一緒に悩み、初めての育児に不安を抱きながらも前向きに育児に取り組む産婦に寄り添っている学生の姿がある。妊産婦と共に過ごし「その人を見る」「その人の気持ちを見る」ことは、その人を知ることとなる。学生のこのような知る体験は、受け持ちケースの状態を知識に戻って確認し、分かるということに繋がる。臨床実習の場は、専門職としての実践に向けて学生が準備を行うための場であり、学んできた理論を検証し、技術を習得するために患者に接する場である。(中略)実践教育でもっとも中心にあるのは実践することではなく、学ぶことである⁸⁾。学生の受け持ちケースに寄り添い「見ること」「知ること」の過程は看護を学ぶということになる。

さらに、「触れること」により学生の感覚が刺激されている。学生は妊婦の増大した腹部に触れ、胎動を妊婦と共に感じ胎児心音を聞くことで胎児の存在を確認する。学生は胎児の存在から「人の生命の神秘さを考えた」と述べている。また、分娩期には母子共に安全な出産を願い産婦へのマッサージに力が入る。学生は「産婦が苦しみながら

も新しい命を生み出す場面」から人間の尊厳に気付いたと述べている。また、出生したばかりの新生児の柔らかい身体に触れ、大切な存在であることを実感している。「触れる」という行為は相互作用を持っている。その人に触れる行為は「関心を持って見ていること」が看護の対象に伝わり、それがケアリングの行為となる。

学生は臨地実習において、妊娠期、分娩期、育児の場面、新生児のケアを通して受け持ちケースと「共に在る」。学生はその人のためだけに注ぐことのできる多くの時間を共に過ごし、妊産褥婦や新生児に問いかけたり自分の気持ちを伝え、受け持ちケースのための学生で在ることを伝える行為を看護というかたちで創りだしている。学生にとって、患者の存在が、また、患者にとって学生の存在が明確になった時、「共に在る」という感覚が芽生えてくる⁹⁾。学生は「看護実践に対し受け持ちケースからのありがとう、嬉しかったの言葉が私の励みになった」と、感動した体験の経験内容としてあげている。「何もできないと思っていた私でも受け持ちケースの役に立つことができた」という気付きは学生に大きな喜びと自信を与えている。すると学生は受け持ちケースが特別な存在として思え、受け持ちケースとの距離が近づく。ケアする相手をこの世に一人しかいない独自の存在として対応し、相手の感情を把握し、その人を一般の人から区別することの重要性をワトソンは述べている¹⁰⁾。学生と受け持ちケースの相互関係を通した双方の関心の一致は、まさにケアリングの経験そのものである。

足立¹¹⁾は、知識と技術を身につけそれを使えるようになることによって初めて患者に対して関心を向けることができるようになる」と述べている。臨地実習を経験したすべての学生はケアリングの経験から「看護の知識・技術」、「アセスメント能力」、「コミュニケーション技術」、「看護の個性」など今後の課題を見いだしている。学生は看護の対象と関わる中でそれぞれの課題を達成し、対象に関心を寄せることの重要性に気付かされる経験を重ね、看護の学習者としてさらなる成長が期待できる。

2. 当事者参加授業から臨地実習へケアリング経験の繋がり

相手に感心をもって集中して「聴く」という態度は人と話をする時に重要であり、看護の対象者が看護師に求めているものに対する関心・意識を広げるために重要である¹²⁾。本学母性看護学では、妊娠・分娩・育児を体験した女性の語りからケアリングを学ぶことを目的に当事者参加授業を実施し6年目となる。当事者参加授業は2年次後期の母性臨床看護論Ⅱで実施されている。3年次の臨地実習前に学生は当事者参加授業において、当事者の生の体験の語りに共感し、妊娠・分娩・育児に向けた期待や不安といった当事者の揺らぐ心理を理解し、新しい家族を迎えるためにたくましく生きる当事者の力を感じ取っている。さらに学生はこの「他者とつながる」体験から「人間」として・「看護の学習者」として・「社会」と関連した課題を見いだしている。当事者参加授業は臨地実習での看護実践に向けた学生のレディネスを高める教育方法としての効果を得ている¹³⁾。母性看護学講座では、臨地実習に向けたオリエンテーションで、当事者参加授業での学びを振り返る機会を持っている。当事者参加授業に協力した母親から後日寄せられた感想の一部を紹介し、当事者参加授業で学生一人ひとりが当事者の語りに耳を傾け、当事者の思いに共感したケアリング体験や「人間」「看護の学習者」として、「社会」と関連した課題を見出した経験を想起させている。臨地実習での看護を通して学生は「一人の女性として自己の健康、権利をリプロダクティブ・ヘルス/ライツを通して学んでいきたい」、「個別性ある看護や生活環境に応じたアプローチを行っていく必要を感じた」、「地域での生活やケアを考えながら病棟における看護を考えていくこと」と当事者参加授業から繋がる課題を看護実践の中からも学んでいる。以上のことから、当事者参加授業から母性看護学臨地実習へとケアリング経験を通した看護の学習者としての学びの継続性が示唆される。

看護学生にとって、「他者とつながる」という経験を得ることは、臨地実習においても非常に難しいことである。しかし、母性看護学臨地実習に

において学生は、「分娩時そばにいて手を握ることしかできなかったが、分娩後産婦からありがとうの言葉をもらった時は嬉しかった」また、産褥期の看護を通して「授乳時には必ず付き添い、新生児の様子だけではなく、母乳分泌の少ない産婦の気持ちに添うことができた」とケアリング経験の内容を述べている。周産期看護ではドゥーラの役割を学ぶ機会があり、「そばにいる」ことの意味を学ぶ場を与えられている。当事者参加授業におけるケアリング経験、さらに母性看護学臨地実習でのケアリング経験を積み重ね、「他者への関心や気遣い」からお互いの心が触れ合い、通じ合うような実感をもてる学生は少なくない。

看護におけるヒューマンケアとは人間的尊厳を守り、高め、維持することが目的とされている¹⁴⁾。ヒューマンケアには、価値観、ケアへの意思と熱意、知識、実行行為、それらによって生み出される事柄が含まれる。(中略)その内容としては、(中略)人間同士のやりとり、次いで看護ケアのプロセスを知ること、最後に、「自分というもの(self)」を知ること、人の力とやりとりの限界を知ること、がある¹⁵⁾。Mayeroffはケアリングの要素として知識、リズムを変えること、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気を挙げており、この要素は患者の成長や自己実現を助けることに役立つものであり、また、他者を援助することを通して、自らも成長するということを看護師が看護の経験を通して実感できるものとしている¹⁶⁾。母性看護学臨地実習では、学生は妊産褥婦や新生児の関わりを通し、看護の対象者に共感し、常にそばに寄り添うことの重要性を理解したうえで、看護の実践に努力する「忍耐」、母性看護学の「知識」、受け持ちケースへの「信頼」「謙遜」「希望」「勇気」を学んでいる。

VI. 今後の課題

看護は人と人との関係における行為であり、看護の対象者とのつながりを持たなければ成り立たない。看護師は、看護の知識・技術と対象への関心を注ぐことで、人との深い関係を成立させることができる。今回、ワトソンのケアリング理論を

参考にした独自の調査項目を活用し、母性看護学臨地実習における学生のケアリング体験を調査した。その結果から母性看護学臨地実習において学生は偏りなく学び、自己の成長に繋がっていた。このことは、我々母性看護学の教員にとっても大きな喜びであり教育に向けての力となる結果である。本研究での学生のケアリング経験記述内容の分析は学生のケアリング経験5段階リッカート尺度による、非常にそう思う「5」、そう思う「4」に限定したものである。ケアリングの経験がなかった学生の臨地実習経験については、今後もケアリング経験の調査を重ね検討していきたい。さらに、学内における当事者参加授業及び臨地実習の動機となる学内臨地実習オリエンテーションが、臨地実習の場面を通じた連続性ある学生のケアリング経験の成果に繋がる教育的効果の検証が課題である。

看護教育では、専門職者として学びを深める中で自らの人間的成長へ繋げることが目標となる。学生の将来に繋がる有意味学習の場で培った学びがさらなる学習意欲となり、人間的深みのある看護職者として成長することを期待したい。

VII. まとめ

母性看護学臨地実習において学生は、短い受け持ちケースとの関わり期間の中で妊産褥婦や新生児に寄り添い、対象の語りや行為、看護実践の意味を理解しようと努力していた。そして、学生の看護実践は、ケアリングの経験から成り立っていた。今回の研究から、以下の点が確認された。

1. 母性看護学臨地実習において学生は、「他者との繋がり」を実感したケアリングの経験をしていた。
2. ケアリングの経験は、他者をつながる能力を向上させ、一人ひとりの女性に添う看護の実践に繋がる。
3. 母性看護学当事者参加授業から臨地実習へとケアリング経験の学びから看護を深める教育効果の継続性が示唆された。
4. 学生のケアリング経験は、看護者としての成長のアウトカムへと示唆された。

謝辞

母性看護学臨地実習において、学生を快く受け入れていただいた受け持ちケースの方々、共に看護を追求し学生を指導していただいた病棟の皆様、自らの学びを本研究にデータとして提供していただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) Jean Watson：ワトソン看護論 人間科学とヒューマンケア、医学書院、35-40、2004
- 2) 前掲書1) 91-93
- 3) 前掲書1)
- 4) 伏見正江、森越美香、山下貴美子、佐野千栄子：母性臨床看護論「「当時者参加授業」－双子を出産した母親の体験からの学び－、平成16年度山梨県立看護大学短期大学部共同研究費による研究報告、36-41、2005
- 5) 足立祐子：PBLテュートリアル教育でおこなったフィジカルアセスメントの学習成果－3年間の学習態度評価と実技評価－、日本赤十字武蔵野短期大学紀要17号、1-6、2004
- 6) 千葉京子、川崎彰子他：問題基盤型学習（PBL）を用いたテュートリアル教育－対人関係技能の発達に焦点をあてて－、日本赤十字武蔵野短期大学紀要第17号、7-11、2004
- 7) 野並葉子：ケアリングの看護を体験する看護学実習、日本看護学教育学会誌、Vol.12 No.3、40-43、2003
- 8) Kathleen B. Gaberson、勝原裕美子監訳：臨地実習のストラテジー、医学書院、4-11、2002
- 9) 前掲書7)
- 10) 前掲書1) 41-48
- 11) 足立みゆき、宮脇美保子：特集 看護実践におけるケアリング 看護師のどのような経験が「他者とながりをもつ能力」を高めるのか、Vol.9 No.12、14-18、2003
- 12) 前掲書10)
- 13) 前掲書4)
- 14) 前掲書1)
- 15) 前掲書1)
- 16) ミルトン・メイヤロフ、田村真・向野宣之訳：ケアの本質、ゆみる出版、1987
- 17) Jean Watson、筒井真優美監訳：ワトソン 看護におけるケアリングの探求、日本看護協会出版会、3003
- 18) Em Olivia Bevis Jean Watson、安酸史子監訳：ケアリングカリキュラム 看護教育の新しいパラダイム、医学書院、1999
- 19) 谷垣静子、松田明子他：特集 看護実践におけるケアリング 教員は学生にケアリング教育ができているのか、Quality Nursing、Vol.9 No.12、35-39、2003
- 20) 安酸史子、佐藤キエ子他：時代を超えて看護教育で伝えたいもの、日本看護学教育学会誌、Vol.12 No.3、31-36、2003
- 21) 宮脇美保子：特集 看護実践におけるケアリング 患者が求めるケアリングに看護師は応えられているか、Quality Nursing、Vol.9 No.12、4-8、2003
- 22) 澤田節子、甲斐春代他：「ケアする人」「ケアされる人」に求められるケアリング 臨地実習における指導場面の分析から、看護教育、Vol.46 No.2、104-109、2005
- 23) 斉藤勉：教育的ケアリングとは何か、日本看護教育学会誌、Vol.12 No.3、21-29、2003
- 24) 中村雄二郎：臨床の知とは何か、岩波新書、2002
- 25) 上野千鶴子、中西正司：当事者主権、岩波新書、2003
- 26) 山下貴美子、藤波久恵、伏見正江、松尾邦江：リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康と権利）に向けて－母性看護学臨地実習の現状と課題－、山梨県立看護大学短期大学部紀要、Vol.8No.1、2002
- 27) Rosemarie Rizzo Parse、高橋照子監訳：パーシィ看護理論 人間生成の現象学的探求、医学書院、2004

A Report from Maternal Nursing Practice - Students' Experience of Caring

YAMASHITA Kimiko FUSHIMI Masae MORIKOSHI Mika SANO Chieko

ABSTRACT

Program of the Fourth Peking World Woman Conference (1995) stressed importance of sensitive point of view concerning gender in professions caring for woman health, to promote reproductive health and rights (i.e. health and rights of gender and reproduction) . Recently, domestic violence as well as sexually transmitted diseases and other problems are coming up to the surface, suggesting that there is a need for nursing that can meet the requirements of woman by understanding and respecting their individual backgrounds, especially in countries with deep-rooted gender standards such as Japan,

As previously shown by J. Watson, in nursing education, it is important to teach students how to share sympathy and warmth, as well as be interested in ethical and moral problems. In the maternal nursing seminars in our school, we introduced caring lessons with participation of persons concerned to provide the students an experience of relationship with another people and sharing sympathy for their talks. In addition, in maternal nursing practice on the spot, the students get experience of caring by communication with young mothers and their newborn babies. In this educational system, involving lessons with participation of persons concerned as well as practice on the spot, experience of caring is supposed to improve education efficacy and consequently quality of nursing.

In the present study, we aimed to evaluate recent situation of students' experience of human caring during maternal nursing practice on the spot. For this purpose, we performed self-fill out questionnaire analysis. The subjects of our study were 98 third-year students who took part in the maternal nursing practice on the spot in 2004. They were given following eight categories of questions, according to the Watson's caring theory. 1. "Nursing helped me to grow up." 2. "I was interested in the psychological aspect of young mothers." 3. "I met the needs of young mothers." 4. "I recognized the dignity of people." 5. "I recognized possibilities of human." 6. "My responsibility got improved." 7. "I was impressed very much by my experience." 8. "I could find my next theme." Each category of questions used a five level scale, and was given an additional space to freely explain the reason for answer. As a result, we confirmed that many students could feel their relationship with the others during caring. It was concluded that students' experience of caring is useful for nursing education.[]

Keywords: Maternal Nursing Practice on the Spot; Experience of human caring; Advocacy